

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提ひさげに入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧おそれがある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋ふたにして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸ひたしても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹ゆだった時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸むされて、蚤のみの食ったようにむず痒がゆい。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのぼしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒はそうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。じゃが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所
が鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、
上眼うわめを使って、弟子の僧の足に 輝あかざれのきれいているのを眺めなが
ら、腹を立てたような声で、
——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりも
かえって気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、鼻へ
出来はじめた。云わば毛をむしった小鳥まるやきをそっくり丸炙にした
ような形である。

Read by Yumi Boutwell 6-5-08

Text from http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房 1986（昭和61）年9月24日第1刷発行 1997（平成9）年4月15日第14刷発行 底
本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房 1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月 入力：平山誠、野口英司
校正：もりみつじゅんじ 1997年11月4日公開 2004年3月7日修正 青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図
書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

